

〔研究論文〕

D. スミスの Institutional Ethnography の社会学を理解するための キーワードをめぐって

椎野 信雄

〔Article〕

On the Keywords to Understand D. Smith's Sociology of Institutional Ethnography

Nobuo SHINO

Abstract

There is a sociology of qualitative social research based on theoretical information from a Canadian sociologist Dorothy Smith's sociology of institutional ethnography. Researchers using these approaches examine social problems, and explicate how these social problems are built up, and what social relations organize these problems. Several preparations are needed to practice these social researches. One of such preparations is to consider the terms (keywords) referred to in practicing social researches. The keywords of D. Smith, standpoint theory, institutional ethnography, ruling relations are selected. We will see "who is Dorothy Smith", "what is the standpoint theory", "institutional ethnography", and "what are ruling relations" as follows. These terms are sources of reference to practices of social researches based on institutional ethnography. We believe these keywords are useful as practical tools for social researches.

1. はじめに

カナダの社会学者ドロシー・スミスの社会学・インスティテューショナル・エスノグラフィー (institutional ethnography) からの理論情報に基づいた質的社会調査の社会学がある。こうしたアプローチを用いる研究者は、社会問題を調査し、どのようにこうした社会問題が構築され、そしてどんな社会関係がこうした問題を組織化するのかを解明している。こうした社会調査を実践するには、幾つかの準備が必要である。こうした準備の一つに、社会調査を実践するのに参照する用語(キーワード)についての考察がある。選択されたキーワードは、D. Smith, standpoint theory, institutional ethnography, ruling relations である。以下では、順に「ドロシー・スミスとは誰か」「立場の論理とは何か」「institutional ethnography」「支配関係とは何か」を見ていく。これらの用語は、インスティテューショナル・エスノグラフィーに基づいた社会調査を実践する際には参考になるソースである。これらのキーワードは、社会調査の実践道具として有用だと信じている。

2. Who is Dorothy Smith ?

ドロシー・スミスとは誰か。日本語で読める社会学者スミスの紹介文としては以下のようなもの

がある。

「スミス、D. Smith, Dorothy Edith 1926 ～

イギリスに生まれる。1955年 London School of Economics で学士号取得後、アメリカ合衆国に渡り、1963年カリフォルニア大学バークレー校で社会学の博士号を取得。同じ頃、2人の幼い子供を抱えたシングルマザーとなる。博士号取得後は、カリフォルニア大学バークレー校、イギリスのエセックス大学を経て、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学、トロント大学で教鞭をとった。

1970年代にカナダで女性運動に参加したことが転機となり、マルクス, K. やガーフィンケル, H. のエスノメソドロロジーなどに影響を受けた「フェミニスト社会学」を展開する。自身の日々の生活における2つの経験(公的領域における社会学者としての経験と私的領域における妻や母としての経験)の間の断絶が、スミスの社会学の出発点である。人々の日常生活世界における局所的で個別的で具体的な経験が、公的な領域で語りうる脱局所的で一般的で抽象的な「客観化された知識」に転換される際の力関係を発見するのである。

人々の経験する局所的な日常生活が、教育や医療や行政や経営などの諸制度に関わる組織複合体につながれ、脱局所的な諸関係によって組み立てられていくのはいかにしてかをスミスは問う。日常生活世界と諸制度を結びつける実際の人々の進行中の諸活動を可視化するため、制度のエスノグラフィー institutional ethnography という社会学的記述を開発していくのである。

エスノグラフィー、エスノメソドロロジー、フェミニズム

[主著] Smith, Dorothy Edith *The Everyday World as Problematic: A Feminist Sociology*, Northeastern University Press, 1987.]¹

では、英語文ではどのように紹介がなされているのだろうか。以下で見ていくことにする。

2-1. ドロシー・エディス・スミス：伝記²

ドロシー・エディス・スミス(Dorothy Edith Smith)(1926年7月6日生まれ)は、フェミニスト理論・家族研究・方法論のような社会学のサブフィールドだけでなく、女性学・心理学・教育研究を含むさまざまな専門分野に研究関心のあるカナダの社会学者である。スミスは、フェミニストの立場の理論や institutional ethnography(インスティテューショナル・エスノグラフィー)の社会学的下位分野を創設した。

伝記

スミスは、3人の息子も持つドロシー・F・プレイス(Dorothy F. Place)とトム・プレイス(Tom Place)の両親の下、イングランドのヨークシャーのノーサラトン(Northallerton, Yorkshire, England)で生まれた。彼女の兄弟の一人ウルリン・プレイス(Ullin Place)は、脳の過程としての意識についての研究でよく知られている。もう1人は、世に認められたイギリスの詩人、ミルナー・プレイス(Milner Place)である。

スミスは、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(LSE)の学士課程に入り、1955年に社会人類学専攻で社会学の理学士号を取得した。その後、LSEに通う間に会ったウィリアム・リード・スミス(William Reid Smith)と結婚し、アメリカに移住した。彼らは、カリフォルニア大学バークレー校の大学院に通った。スミスは、1963年に、第2子の誕生から9ヵ月後に、社会学の博士号を取得した。その後まもなくして、彼女と夫は離婚した。彼女が子供の親権を保持した。その後、1964年から1966年までUCバークレー校で講師として教えた。

1967年に、ブリティッシュ・コロンビア大学で教えるためにバンクーバー・ブリティッシュ・

コロンビアに、2人の息子と共に移り、そこで、女性研究プログラムを確立するのを助けた。オンタリオ教育研究インスティテュート(the Ontario Institute for Studies in Education)で働くために、1977年にオンタリオ州トロントに移り、そこに退職するまでいた。1994年に彼女は、ビクトリア大学の adjunct professor(兼任教授)になり、そこで institutional ethnography の研究を続けた。スミスは、フェミニスト・ジャーナル Signs の国際諮問委員会のメンバーである。

2-2. ドロシー・E・スミス 受賞声明³

25年以上の間、社会学者ドロシー・E・スミス(Dorothy E. Smith)は、社会学的真理や社会学的実践についての私たちの理解に挑戦し、同時にその理解を深化させるような説得力のある作品を産み出してきた。彼女の前にはほとんどいないが、ドロシー・スミスは、私たちが最も専心しているアイデアに関して私たち自身とのディベート(討論)に私たちを引き込んでいる。(そのアイデアとは)研究者と研究対象者の関係、社会形態としてのテキストと言語の性質、個々のエージェンシー(主体)と社会構造を根本的に結び付ける際の歴史的・政治的コンテキストの役割、中心よりむしろ周辺からじっと見ることのパワーである。“institutional ethnography”や、生きられた経験を構成する日常の具体的な社会関係への焦点のための議論、パワーの概念的性質、に関するスミスの著作は、社会学を誘導してきたし、専門分野を超えた学識を形成した。

同時に完全に独創的だが、社会学の基盤に深く共鳴しているドロシー・スミスの作品は、おそらくその初期の形態で最もよく知られている。社会学の女性排除およびそのような排他的実践の本質、への異議申し立てである。そうした排除の認識論的含意を理論化する最初の社会学者として、スミスの批判は、この専門分野の知識の社会的編成と、その専門分野自体の主題の削除を同時に示していた。ドロシー・スミスは、女性の研究のための認識論的位置と理論的根拠を見つけ出し、創発的なフェミニスト社会学に、女性の生活への探究のための理論的基盤を与えたのである。

3つの重要なエッセイ(評論)コレクションの一つ *The Everyday World as Problematic: A Feminist Sociology* (Northeastern University Press, 1987)において、彼女は「断層線」"line of fault"一溝一経験とその表現の社会形態の間の断絶、について書いている。そのコレクションにおいて、彼女は社会学のためにおよび自分自身のために新しいアジェンダ(議題)を提示している。どのように具体的な経験が、より大きな、ローカル(local)外のイデオロギーや支配する実践に、関連づけられ、それによって形成されるのかを、写像し分節化すること。

スミスの研究は、その挑戦的で知的に挑発的な場所から、社会の支配関係の基礎および社会学の社会的世界の知識のためのグリスト(種)を形成する「権力の概念的実践」(the conceptual practices of power)と彼女が呼んでいるものを示す知識社会学の探検まで及んでいた。これらのトピックスに関する重要なエッセイは、彼女の第2巻 *The Conceptual Practices of Power: A Feminist Sociology of Knowledge* (Northeastern University Press, 1990)に集められている。

マルクスがかつて『『出入禁止』の警告を超えて』を、資本の施錠した門扉に、貼り付けるように私たちに勧めたように、ドロシー・スミスもまた第3巻のエッセイ *Texts, Facts, and Femininity* (Routledge, 1990)において、批判を越えていくように私たちに勧めている。そこにおいて、彼女は言説の内部における複雑な関係形態の存在、およびテキスト以上のものとしての知識—および知りうる—主題を弁護している。

私たちは、社会的世界に関する新しい経験的角度を提供するような、およびもうひとつ別の理論化方法を私たちに与えてくれるような、あるビジョンの永続的なシフト(変更)を提供するような、

そしてそのビジョンを研究者と共に寛大に共有するような、学者を私たちの間で、評価し誉めたたえている。だが、私たちは、維持された独創的な仕方ですることをする人のために、私たちの最高の賞をとってある。そうする際に、彼らは、私たち自身の社会学的範囲を広げ、社会的探究の新世界の可能性を私たちに遺譲してくれている。長年に渡って、ドロシー・スミスの学識は、私たちにそのような贈り物を与えてくれたし、かくして「顕著な学識の職歴」のためのこの賞によって表わされる認知に値しているのである。

Sarah Fenstermaker, Chair, Career of Distinguished Scholarship Award Selection Committee(サラ・フェンスターメイカー「顕著な学識の職歴」賞選考委員会、委員長)

2-3. ドロシー・エディス・スミス：伝記⁴

ドロシー・エディス・スミス(Drothy Edith Smith)は1926年7月6日に生まれた。彼女はカナダの偉大な社会学者であった。研究活動に関心があり、さまざまな分野に研究関心のある研究者として働くのが好きである。それらのテーマには、女性研究・心理学・教育研究が含まれている。また、フェミニスト理論・家族研究のような幾つかの偉大なテーマに関する、そして方法論にも関する、社会学者としても働き続けた。ドロシー・スミスは、フェミニストの立場の理論(standpoint theory)や institutional ethnography の社会的下位分野を説明した。

彼女は女性に対する社会の無礼な行動に光を当てている。彼女は社会に、社会の責任に気づくように要求した。その責任は、どういうわけか目に見えないが、存在しており、人間の責任と同じくらい重要なのである。彼女によれば、女性は、男性にとって同じだとはされない家事を継続的に行なわなければならないのである。彼女(女性)も、家で給料なしで働いているが、いまだに十分な敬意が払われていない。女性たちは、無学な社会の大部分において無礼にひどい扱いを受けているのである。

教育を受けた女の子は男性支配に関して質問ができる(という信念)ということで、社会は、女の子に教育を受けさせないことがよいと信じている。社会によれば、女性たちに敬意を払わないことや低標準を支払うことを除いて、女性たちは、彼女の経験している搾取に関して質問を提起するのを彼女に許すような権利さえ与えられていないのである。基本的権利にもかかわらず、教育権は、すべての家族に娘に教育を受けさせる制限を課しているが、社会条件が明らかに私たちの前にあるので、フェミニスト(理論)が、社会の前に出された一つの理論にすぎないと主張するかもしれない。その理論は、その後は、本のページの下に埋められたままであり、変化をもたらすかもしれない仕方では、社会に影響を及ぼすことはなかったのである。

それにもかかわらず、自己を社会のヒーローとして証明し、社会の女性嫌悪の見解の前で、決して頭を下げてこなかった女性たちがいたのである。

2-4. ドロシー・スミス：歴史とフェミニスト理論⁵

トムとドロシー・プレイス(Tom and Dorothy Place)と3人の兄弟のところに、イングランド・ヨークシャー・ノーサラトン(Northallerton Yorkshire England)で1926年7月6日に生まれる。

歴史

ドロシー・エディス・スミス(Dorothy Edith Smith)は、フェミニスト理論・家族研究・方法論を含む社会学のサブフィールドだけでなく、社会学や女性研究・心理学・教育研究を含む多くの他の専門分野にも研究関心のあるカナダの社会学者である。彼女はまた、フェミニストの立場の理論

(standpoint theory)や institutional ethnography の社会学的下位分野を創設した。

ドロシーは英国に生まれた。当時、彼女が生活しているところで仕事を見つけることは困難だった。それでさまざまな仕事をし、出版業界で秘書の仕事をするようになって、ついにはうんざりし、出版業に入り込もうとしたが、その当時、女の子には何もなかった。彼女は、結局、大学に行き、社会学の学位を得た。

大学院に行くために合衆国に来た時、彼女は夫に出会い、結婚し、二人の子どもを持ち、その間に博士号を得た。彼女は、結局、社会学を教え始めた。44人の教授陣で教える唯一の女性だった。彼女の知的な人生には、3つの主な瞬間があった。一つはロンドン・スクール・オブ・エコノミクスに行くことで、社会学に魅せられたことであった。二番目は、ジョージ・ハーバート・ミード (George Herbert Mead)に関する、パークレーでタモツ・シブタニによって与えられたコースであった。それは、モーリス・メルロー・ポンティ (Maurice Merleau-Ponty)の現象学への後ほどの深い関与のための基礎を築いたものだった。最後は女性運動だった。

ドロシーの最大の人生変化に関して、彼女は女性運動が彼女のためであったと結論を下した。それによって彼女は奇妙な道に導かれ、社会学は彼女が実践を通して学んだものだった。ブリティッシュ・コロンビア大学 (the University of British Columbia)で教え、初期の女性研究コースの一つで教えた。彼女は、他の4人の女性と共に始め、教えるための書籍や資料の方法がなかった。それで彼女はそれを作り上げなければならなかったのである。

カール・マルクスによって影響された。彼の仕事は多くの点で彼女にとって非常に重要なものになった。部分的には政治のためだが、女性のための社会学および今では人々のための社会学として考えられているものを開発するのを助ける思考方法としてはなおさらそうなのである。

彼女は、オンタリオ教育研究インスティテュート (Ontario Institute for Studies in Education) (OISE)のために社会学を教えるのにトロントに来た。彼女が他のフェミニスト、マルグリット・アイクラー (Margrit Eichler)やメアリー・オブライエン (Mary O'Brien)と出会ったところである OISE は女性観において進歩的だった。社会学者はすべてフェミニスト研究者だった。そしてこの時に、彼女は女性のための社会学を書いたのである。それから彼女は、彼女の日常世界および、社会的なものの調査のアクチュアリティにおける主婦や母の立場において始めて、そして日常や日常の物事を行うことの転向したアクチュアリティを得る、という考えを持って、女性/人々のための社会学を開発することについて論文を書き、発表した。

彼女の最初の定式化は「社会学のラディカル(根本的)な批判としての女性のパースペクティブ」だった。彼女には自身の話す権限を認知するのが困難だったので、そして私たちの男性支配の社会の故に、彼女には以前にこのことを書くことは困難だったが、結局は、彼女は女性のために書いたのである。

彼女は、その後、多くの論文フェミニズムやマルクス主義として最も認知されているもの「始める所、行く道(行き方)」を書き、発表した。マルクス主義フェミニズムは、女性を解放する方法として資本主義の解体(廃棄)に焦点を当てるフェミニスト理論のサブタイプ(皿型)である。経済的不平等や依存、政治的混乱、男女の究極的には不健康な社会関係を引き起こす私有財産が、現在の社会的コンクストにおける女性の抑圧の根源である、とマルクス主義フェミニズムは述べている。

最もよく知られている点

社会学の変換、人種・階級・ジェンダーを含むフェミニストの立場の理論：スミスの提起する問題の一つは「女性の立場から社会学はどのように見えるのだろうか」である。事実、主な関心の一つ

は、支配する概念様式を支持する男性中心のアプローチを明示的にあるいは暗示的に採用するものとして彼女が見なしている、主流の社会学を批判することである。スミスにとって「すべての知識は、ある特定の立場からの知識であり、社会の客観的知識として主張されてきたものは、男性のバイアスを隠している。」のである。

3. What is standpoint theory ?

standpoint theory とは何か。まず、standpoint は英和辞典的には「立場、見地、観点、見方」であり、立脚点・観察点・足点・着眼点などでもあり、スタンドポイント・視座・目線・スタンス・立脚地・視角・視点もある。standpoint は、文字通りだと「立つ地点」「立っている位置」「立ち位置」のことだろう。英英事典では standpoint には、point of view (観点) や perspective (観点) そして a mental position from which things are viewed (物を見る精神的な立場) や a set of beliefs and ideas from which opinions and decisions are formed (そこから意見や意思が形成される場所の一組の信念や観念) や an opinion or a way of thinking about ideas or situations (意見や、観念や状況についての考え方) の解釈が載っている。

standpoint の日本語翻訳語としては「立場」で間違いではないが、では日本語で「立場」とはなんだろうか。国語辞書には、1 人の立つ場所。立っている所。2 その人の置かれている地位や境遇。また、面目。3 その状況から生じる考え方。観点。立脚点。あるいは、①立つ場所。立っている所。②何かをするためのよりどころ。立つ瀬。③その人が置かれている、地位・境遇・条件など。④物の見方・考え方。見地。立脚点。などが載っている。つまり、前者の3や後者の④だけでなく、別のニュアンスが含まれているのだ。「主に人間社会の中で気兼ねなく立っていられる場所」といった意味合いがあると解説する辞典もある。特に日本語の「立場」には、「立場をわかまえる」や「相手の立場に立って考える」を是認するメタ理論が伴っているのである。これは英語の standpoint にはないニュアンスである。

さらに theory は英和辞典的には「学説・仮説、理論・原理、理屈・空論、憶測・推測、定理・公理、論・説」である。したがって standpoint theory は「立場論」「立場説」でよく、硬い日本語翻訳語だが「立場の理論」で妥当だろう。

では、standpoint theory「立場の理論」で、何が言われているのかを見ていくことにする。

3-1. 立場の理論⁶

スミスの前に、アメリカのフェミニスト理論家サンドラ・ハーディング(Sandra Harding)は、女性の知識を強調するために、立場の理論(standpoint theory)の概念を作り出した。ヒエラルキー(階層構造)が、社会的現実についての無知と、このヒエラルキーが優遇する人々の間での重大な争点を、自然に作り出す、と論じているのだ。しかし、これらのはしごの底にいる者たちは、社会問題を説明しやすくするパースペクティブを持っていたのである。

スミスがハーディングの理論を形作りながら、立場の観念を開発したのは、1960年代における大学院生としての彼女の時代の間であった。この時代の中に、スミスは、彼女自身が「二つの主観性、家庭と大学」を経験していることを、そしてこれらの二つの世界は混ぜ合わせるできないことを、認知していた。彼女自身の立場を認知して、スミスは社会学が立場の認識を欠いているという事実之光を当てた。この時点で、社会学の方法と理論は男性支配の社会的世界の上に形成さ

れ、築かれてきたのであり、性生殖・子供・家事という女性の世界を意図せずは無視しているのである。女性の義務は、文化への付加物としてというよりもむしろ社会の自然的部分と見なされている。女性のパースペクティブから質問するならば、社会的 institutions についてもっと多くのことを学ぶことができると、スミスは信じていた。少数派集団にとって、彼らが経験している世界の間の恒常的分離、対、支配集団の見解に絶えず順応しなければならないこと、が抑圧を作り出し、それは周辺化された集団のメンバーが自身の「真の」自己から疎外されていると感じることに至ることがありえると、スミスは結論を下したのだ。

事例

スミスは、立場の理論の重要性の一例として、そしてそれをよりよく説明する方法として、一つ特定の物語をしばしば用いる。それは次のようなものになる…

ある日、オンタリオ州で列車に乗っている間、スミスは、列車が通り過ぎるのを見ながら、インディアンが川のそばに一緒に立っているのを観察した。彼らがちょうどそれだとスミスが分かったのは、こうした最初の仮説を立てた後のみであった。彼らは仮説だった。その仮説が本当かどうかを彼女が知る方法がないという仮説。彼女は彼らを「インディアン」と呼んだが、彼女は、確かに、彼らの起原が何であるのかを知ったはずがないのである。彼女は彼らを家族と呼んだが、それはおそらく本当でなかったかもしれないだろう。彼女はまた彼らが、列車が通り過ぎるのを見ているとも言った。時空における彼女の位置や、列車に乗っている・「家族」を眺めている彼女の位置にのみ基づいて創発した仮説である。

スミスにとって、これは彼女自身の特権の表象として機能した。それを通して、彼女は仮説を立て、直ぐに彼らを「インディアン」の集団に押し付けたのだ。それは、経験が空間・時間・状況を横断して異なり、一つの観点／存在点のみに基づいて社会―や支配関係―を創造することは不公平であるという結論に彼女を導くのを助けたのである。

3-2. 立場の論理⁷

立場の理論、知識は社会的位置から生じると論じるフェミニストの理論的パースペクティブ。このパースペクティブは、伝統的科學が客観的であるということを否定し、研究と理論が女性やフェミニストの考え方を無視して、周辺化してきたことを示唆している。この理論は、抑圧された階級出身の人々が、特権階級出の人々には入手可能ではない知識への特別なアクセスを有しているというマルクス主義の議論から出てきた。1970年代に、そのマルクス主義の洞察に鼓舞されたフェミニストの著者たちは、どのように男女間の不平等が知識生産に影響するのかを調べ始めた。彼女らの仕事は、知識の性質と起源を調べる哲学の一分野である認識論と関連しており、知識が常に社会的に状況づけられていることを強調している。ジェンダーや、人種や階級のような他のカテゴリーによって階層化された社会では、人の社会的位置が、人の知ることができるものを形成するのである。

アメリカのフェミニスト理論家サンドラ・ハーディング(Sandra Harding)は、女性の知識を強調する認識論をカテゴリー化するために、*立場の理論*という用語を造り出した。社会的ヒエラルキーの頂点にいる人々が、真の人間関係や社会的現実の真の性質を見失い、かくして学問的な追求における社会的・自然的世界について重大な質問を見逃すことは容易であると彼女は論じていた。対照的に、社会的ヒエラルキーの最低部にいる人々は、学識のためのよりよい出発点である独特な立場を有している。そのような人々はしばしば無視されるが、彼らの周辺化された位置によって実際に、

彼らが重要な調査質問を定義し、社会的・自然的問題を説明することがより容易になるのである。

そのパースペクティブは、カナダの社会学者ドロシー・スミスの仕事によって形作られた。彼女の著作 *The Everyday World as Problematic: A Feminist Sociology* (1987)において、社会学が女性を無視し、客体化してきており、女性を「他者」にしていると、スミスは論じた。女性の経験がフェミニストの知識のための肥沃な土壌であり、社会学的な仕事を女性の日常の経験に基礎づけることによって、社会学者は新しい質問をすることができると、彼女は主張した。例えば、女性が歴史的に社会の介護者であったので、男性はより価値が高く重要だと見なされている抽象的概念について考えることにエネルギーを捧げることができたのだと彼女は断定した。かくして女性の活動は、人間の文化や歴史の一部としてよりもむしろ、不可視なものになり、「自然な」ものとみなされているのである。社会学者は、女性のパースペクティブから始めるならば、なぜ女性がそのような活動に配属されてきたのか、そして教育・家族・政府・経済のような社会的 institutions にとって結果は何だろうかについて具体的な質問をすることができるのである。

立場の理論家は、客観的な経験主義—科学は厳格な方法論を通じて客観的になりうるという考え方—にも疑問を投げかけている。例えば、科学者は中立性の主張にもかかわらず、自身の男性中心主義で性差別主義の研究手法や結果を無視してきたのであり、知識生産者の立場を認知することで人々は科学的権威の位置に内在するパワーにもっと気づくのだとハーディングは述べていた。立場の理論家によれば、女性や他の周辺化された人々のパースペクティブから始める時、人は立場の重要性を認識し、具体化され、自己批判的で、首尾一貫している知識を作り出すようによくなるのである。

アメリカの社会学者パトリア・ヒル・コリンズ (Patricia Hill Collins) は、自著 *Black Feminist Thought: Knowledge, Consciousness, and the Politics of Empowerment* (1990)において、アフリカ系アメリカ人の女性のパースペクティブを強調する立場の理論の一形態を提案した。抑圧のマトリックス—人種・ジェンダー・階級の抑圧と特権の連結システム—が、アフリカ系アメリカ人女性に、自らの周辺化された地位を理解するための弁別的な観点を与えてきたとコリンズは論じた。どのようにアフリカ系アメリカ人の女性が、自らの労働の経済的搾取、自らの権利の政治的否定、および有害なステレオタイプを作り出す支配的な文化イメージの使用、によって抑圧されてきたかを彼女は示した。

そしてアフリカ系アメリカ人の女性がフェミニストの学識に特別な何かをささげることができると、彼女は示唆した。コリンズは、人々を非人間化し客体化する知識を拒否する包括的学識を求めたのである。

立場の理論が、女性の立場が普遍的であるという主張において本質主義であるという批判に取り組むために、立場の理論家は、女性の立場よりもむしろ、フェミニズムの立場を強調することによって、社会的位置の政治的側面に焦点を当ててきた。最近の研究はまた、女性をひとまとめにしないように気をつけてきたし、多くの周辺化された集団 (人種・民族・階級・性的指向・年齢・身体能力・国籍・シティズンシップの地位のカテゴリー) の多様な立場を包含するようにコリンズのパースペクティブを広げてきた。

3-3. 立場の論理⁸

立場の理論は、間主観的言説を分析するためのポストモダン理論である。この全作品は、権威が諸個人の知識(彼らのパースペクティブ)に根ざしている仕方と、そのような権威が及ぼす権力、に関心がある。

立場の理論の最も重要な概念は、個人の自身のパースペクティブが自身の社会的・政治的経験によって形成されているということである。立場は、本質化するものというよりむしろ多面的なものである：ヒスパニック系の女性は、特に民族や性別に関して、いくつかのパースペクティブを一般に共有しているかもしれないが、これらのカテゴリーに参加することによってのみ定義されるのではない。ある人の多くの経験豊かな諸次元の融合が、その個人が世界を見て理解するための立場—観点—を形作っているのである。

立場の理論家は、自然主義的なまたは日常の経験上の、知ることの概念(すなわち認識論)の有用性を強調する。人の立場は(再帰的に考察されていようとなかろうと)どの概念が理解可能であり、どの主張が誰によって聞かれ、理解され、どの特性の世界が知覚的に顕著なものであり、どの理由が関連性があり、説得力があり、どの結論が信頼できるのかを形作っている。

立場の理論は、フェミニストの理論家サンドラ・ハーディングが強い客観性と呼んでいるもの、あるいは周辺化されたおよび/または抑圧された諸個人のパースペクティブが世界のより客観的な説明を創造するのを助けることができるという観念を支持している。内部部外者の現象を通じて、これらの諸個人は、支配的な集団文化に浸された人々が認知できない行動パターンを指し示す独特な地位に置かれている。立場の理論は、周辺化された集団が内部の部外者として現状—支配的な白人男性の特権的位置を表す現状—に異議を唱えることができることによって、周辺化された集団に声を与えるのである。

すべての集団が存在しているような卓越した文化は、すべての人や集団によって同じ仕方で経験されるわけではない。より多くの社会的権力を持つ集団に属する人々の見解は、周辺化された集団における人々よりもっと正当であると確認されている。周辺化された集団における人々は、たとえそのパースペクティブが自分自身のものではなくとも、生き延びるために支配的な文化において「合格する」こと、あるいはバイ文化であることを学ばなければならない。

3-4. 立場⁹

このような立場の用法は、ある集団の人々の知識が他の集団の知識よりも優遇されているような立場の認識論ではない(Clough, 1993)。指導的な考えは、抑圧されたあるいは搾取された人々の立場の内部から出発することは、他の社会的場所からは見えない社会世界の諸相を明らかに示すという約束を保持しているということである。(D. Smith, 1987, 2005)。どのように立場が、社会関係や支配関係を調査するまとめ役として使われているかは、ドロシー・スミス(2006年)の「女性の立場」の図(p.3)において伝達されている。この絵は最近、インスティテューショナル(および政治的活動家)エスノグラフィー(Bisaillon & Rankin, 2013)からの洞察を用いているプロジェクトの輪郭を説明するために適応され、使用されていた。

4. What is institutional ethnography ?

institutional ethnography とは何か。まず、institution は英和辞典的には「制度《文化の基礎となる社会的な秩序》、法令、慣例、慣習、学会、協会、院、団、公共施設《学校・病院・教会など》、(福祉関係の)施設《養護施設・老人ホームなど》、機関、機構、組織、インスティテューション、設立、制定、設定、開始、《米》機関投資家、おなじみのもの[人]、名物、評判者。」である。あるいは「1 初めて何かを始める行為、2 なんらかの目的の促進のための組織がある建物の建設または総合ビル

からなる機関、3 精神的に機能不全の、またはバランスを失った人のための病院、4 ある集団や社会において長い間、重要な特徴となっている習慣、5 特定の目的のために設立され、統一された組織」という解説もある。また「機関・公共機関・制定・設定・おなじみの物・慣習・機関投資家・創立・団・名物」でもある。

英英事典では institution は、「a large and important organization, such as a university or bank: building where people are sent to be cared for, especially a hospital or prison: a custom or tradition that has existed for a long time and is accepted as an important part of a particular society: an occasion when a law, system, etc. begins or is introduced」であり、「an organization that exists to serve a public purpose such as education or support for people who need help: a custom or practice that has existed for a long time and is accepted as an important part of a society」であり、「a large organization that has a particular kind of work or purpose: an important system of organization in society that has existed for a long time: a building that people are sent to when they need to be looked after, for example old people or children with no parents: when something is started or introduced, especially something relating to the law or politics」である。つまり institution は、an organization であり、building であり、a custom であり、an occasion なのである。

ところが institutional ethnography の institution は、以下のように把握されている。『これら (institutions) は、人々の諸活動を連係させるために時間と場所を超えて広がるプロセスである。それらは、「教育や保健医療のような弁別的機能の周りに編成される支配関係に埋め込まれた複合体」を識別している (D. スミス 2005 年、p.225)。他の機能の事例には、移民・投獄・人道的ワーク・コミュニティの組織化が含まれている。この応用においては、institutions は、アーヴィング・ゴッフマン (Erving Goffman)、ハワード・ベッカー (Howard S. Becker)、ハーバート・ガンズ (Herbert J. Gans)、ロベール・カステル (Robert Castel)、ルネ・ルーロ (René Lourau) を含む幾世代の社会学者たちのワーク通りに、刑務所・保護施設・病院・工場のような単数のインスティチューションの場所を指示しているわけではない。』¹⁰

institutional ethnography にとって institution は、一つの組織や施設や建物のことではなく、プロセス (processes) であり、より詳しくは「諸社会関係の交差点」と捉えているのである。ここが institutional ethnography の理解のための特異点なのである。

4 - 1. institutional ethnography¹¹

IE は社会調査の方法である。IE は、特に人々が社会的 institutions (学校、結婚、仕事など) の脈絡においてお互いに相互行為する方法を見て、そしてどのようにそれらの相互行為が institution 化されているかを理解することによって、人々の日常生活を構造化する社会関係を探究している。IE は、産業社会学や仕事の社会学と考えられるはずの特定の企業や組織や雇用部門の民族誌というよりもむしろ、institution 化されてきた相互行為のエスノグラフィーとして最もよく理解されている。インスティチュショナル・エスノグラファーにとっては、通常の日常活動が、社会編成の調査の現場になる。IE は、Dorothy E. Smith によって、「女性のための、人々のための」マルクス主義フェミニスト社会学として、最初に開発された。現在、社会科学・教育・ヒューマンサービス (人的サービス) ・政策研究の研究者によって、institutions 内の人々の活動を連係させるトランスローカルな (ローカルを越えた) 関係をマッピングする (写像する: 地図に描く、位置を解明する) ための方法として使用されている。

4-2. institutional ethnography¹²

Institutional ethnography は、日常生活の社会的編成の研究を強調する研究方法である。このプロジェクトには、社会的場面の広範囲の(大規模な・詳細な)観察とそのような場面における経験や事象についての著述が含まれている。Institutional Ethnography は、カナダの社会学者ドロシー・スミスによって開発された。このプロジェクトは、スミスの著書およびキャンベルとグレゴール(Campbell and Gregor)の *Mapping Social Relations* に基づいている。

4-3. institutional ethnography¹³

これは、人々の生活の編成や、社会的に連係した性格を、目にみえるようにし、解明することを目指す、理論的情報に基づいた研究アプローチである。institutional ethnography は、社会学者ドロシー・スミス(Dorothy Smith)(1977年、1987年、1999年)の研究から始まり、1970年代の間に形作られた一形態の批判的社會探究である。どのように社会の institutions が人々の生活を規制しているのかを明らかにするために、マルクス主義とフェミニストの理論化を活用している「正式の、経験に基づいた、学識のある」研究戦略である。このアプローチの知的な系統と前例の概観については、Marie Campbell & Ann Manicom(1995)と Liza McCoy(2008)を参照のこと。

この探究様式においては、エスノグラフィーの技能や能力は、社会の institutions に埋めこまれていく支配取決を記述し、扱うことに向けられている。社会学者 Kevin Walby(2007)は、この方法の「人間主義的アプローチ」に注目している。そこでは、分析的注目は、どのように社会の institutions が人々を規制しているのかを理解することに向けられている、そしてそこでは、どのように物事が社会的に連係されているのかの解明が、キー・エンドポイント(評価項目)なのである。人々の諸活動のコーディネーター(連係させるもの)としてのテキストの理解が、institutional ethnography と多くの人類学的あるいは社会学的エスノグラフィーを区別している。後者の点にもかかわらず、拡大事例研究法(ケースメソッド)(Burawoy, 2009)、グローバル・エスノグラフィー(Burawoy, 2000)、マルチサイトッド・エスノグラフィー(Marcus, 1998, 2010)、政治的エスノグラフィー(Schatz, 2009)は、インスティテューショナル・(政治的活動家)エスノグラフィーと、幾つかの共通の特徴を共有しているアプローチである。これらの形態のエスノグラフィーには、データ源である人々の実践、の物的特性に密接に関連したままであることへのコミットメントがある。ここにおいて、人々およびその諸活動の物的特性が、これらのものの理論的理解にとって代わるのである。

4-4. SPD-Institutional Ethnography - Society for the Study of Social Problems¹⁴

Institutional Ethnography(IE)は、どのように実際の人々が行い、経験していることが他者たちとの関係において編成されているのかを理解しようとする、独自の調査方法である。認識論的にはIEは、人々が知っていることや経験したことから始める調査(探究)へのコミットメントによって、他の社会学的アプローチとは区別されている。ある人の行為は、その行為がどこでどのように他者たちと連係するのかの認知がないと、決して取り上げられないのである。それが institutional ethnography にとって結局は「社会的なもの」となるものである。したがって存在論的にはIEは、社会的なものを、調査されるべき「外在“out there”」として扱うことを拒否する。むしろ、社会的なものは、—そこにおいては、諸活動に、思考や想像のみならず言語において為されることも含まれているような—ある特定の歴史的に状況づけられた瞬間、において、実際の人々の連係された活動において、まとめられると理解されるのである。

D. スミスの Institutional Ethnography の社会学を理解するためのキーワードをめぐって

IE は、1970 年代と 80 年代の北米の女性運動の脈絡において、「女性のための社会学」(Smith 1987)として、ドロシー E. スミス(Dorothy E. Smith)とその学生によって開発された。より最近ではスミス(2005)は、IE を「人々のための社会学」(Smith 2005)として記述してきた。インスティテューショナル・エスノグラファーは、人々の日常生活のパズルを解明するようにデザインされている。人々は IE 分析の対象ではなく、インスティテューショナル・エスノグラファーは、社会科学の典型である対象化の過程に積極的に抵抗する。IE 研究では、分析の対象は、私たちをお互いに結びつけ、そして一様な矛盾した仕方で一私たちの生活を形作っている、ガバナンスや社会的連係の客観化された関係である

研究は常に、人々が知っていることや経験したことから始まる。つまり、時間上特定の瞬間に、特定のローカルな場面で、人々の実際の実践や活動において始まるのである。研究者は、どのように人々の思考や行為が他者たちの思考や行為と関係しているのかに注意を払う。分析的には、その目的は、どのように物的関係—人々が他者たちと関係して行い、考え、言う実際のことが、実際そうである仕方で、編成され、まとめられているのかを発見することである。IE の分析的目的を実現するためには、人は自分の研究を、人々が言い、行うことを記録することに限定しないのである。むしろ、人々が言い、行うことは、調査研究に参加している個々の人々を結びつけ、かつ超越している連係の方法についての調査(研究)を支えている。IE 研究者は、どのように知ったり行ったりする特定の仕方が、一連のテキストやテキストに媒介された過程(例えば、音楽ビデオ、オンラインニュース配信、印刷メディア、ラジオ、尺度、指標、尺度、理論、分類体系、行政報告、公の言説、政策、立法、申請書その他の通常の職場のテキスト)との人々の日常の関わりによって媒介されているのかを発見しようとしている。究極的には、その目標は、人々に有用であり、研究者との会話において人々が識別してきた懸念や問題を人々が扱うのに役立つ知識を産出することである。

私たちの部署は、IE を拡大し精緻化するために、そして探究方法として IE の有用性を探すために、IE を使っている人々に場所を提供している。私たちは、社会問題研究会(the Society for the Study of Social Problems)の会合と合同してワークショップを定期的に開催している。そこでは、私たちは、初心者およびより「経験豊かな」参加者の両方の貢献を歓迎している。

ニコラ・ウォーターズ(Nicola Waters)、トンムソン・リバーズ大学(Thompson Rivers University)、Institutional Ethnography 議長 2017-2019 年による、2017 年 12 月に最終チェックされた部署のミッション・ステートメント。ドロシー・E・スミス(Dorothy E. Smith)、ビクトリア大学(University of Victoria)、Institutional Ethnography 部署 創設メンバーおよびナオミ・ニコルス(Naomi Nichols)、マギル大学(McGill University)、Institutional Ethnography 部署の議長、2015-2017 年、によって 2016 年 12 月に最後に編集された部署のミッション・ステートメント。

4 – 5. Introduction: What is Institutional Ethnography ? ¹⁵

“Institutional ethnography”は「テキストに媒介された社会的編成」に焦点のある、社会的なものの調査へのアプローチのために使用されるようになってきたラベルである(Smith 1990b)。1980 年代初期にカナダの社会学者ドロシー E スミス (1987)によって開発され、命名された institutional ethnography は、過去数十年にわたって成熟してきて、社会学においてのみならず、看護・教育・ソーシャルワーク(社会福祉事業)・プランニングなどのような多くの他のフィールドを通して国際的に広がってきた。スミスの最初の著述は、このアプローチにスケッチを提供したが、それは研

究者たちが協働で築き上げる方法であり、私たちがやりながら進め方を考え出すのだと、彼女は常に主張した。このアプローチを用いている人々は、非公式な会合やネットワーキングを通じて仕事を共有してきたのであり、institutional ethnographyの概要を練り、明示し、学生たちと共に働きながら、このアプローチを開発しているのである(DeVault and McCoy 2002、および有用な教育用テキストとしてはCampbell and Gregor 2002)。最近、スミス自身は、この「オルタナティブ社会学」(Smith 2005, 2006)についての彼女のビジョンを精緻化し、例証する一対の著作を制作した。

5. What are ruling relations ?

5-1. 支配関係¹⁶

スミスはまた、「管理(行政)の日常の仕事と、管理体制の支配下にある人々の生活を連係させる」ようなインスティテューショナル・コンプレックス(institutionの複合体)である**支配関係**の概念を開発した。これによって、社会は支配と組織を持つことが可能になる。その例が官僚制度と経営のシステムである。

5-2. 支配関係あるいは体制¹⁷

この方法論的用語は、「社会を編成し、規制するさまざまな institution 関係の間のつながりを論証し」、記述する(Frampton et al.,2006,p.37)。支配関係(ruling relations)は、印刷物、映画、テレビ、インターネット、職業などの源泉を通じて、テキストに媒介されている社会関係の種類のことである。例えば、州、職業団体、法人、代理店(政府機関)、アカデミー(学校)、科学は、支配(統治)が成し遂げられるための関係の網の目に関与している。支配関係は、世界について知られたり、言われたりするものを形作る(D.Smith,1996,p.47)「概念・理論・カテゴリー・専門用語の専門体系を生成する」組織を可能にする。支配関係は、人々の社会的経験を、経験のテキストによる説明(アカウント)と取り替えることによって作動する。経験のテキストによる説明(アカウント)は、知られていることを覆い隠し、変形させるのである。Campbell and Manicom(1995)は最初、人間の行為や連係を呼び起こしたり、具現化したりする言語に移動するためにこの支配関係の用語を用いた。この革新は、権力や国家の関連のある諸概念を超えた動きとして意図されていた。

6. おわりに

以上に記載したキーワードは、カナダの社会学者ドロシー・スミスの institutional ethnography の社会学から洞察を得ている研究者が、社会問題を問題にする社会調査の方法を実践する際に、研究実践の作業を構成するアイデアの設計の開始のために役立つように選択したものである。特に、institutional ethnography に基づく社会調査の方法を使用することを新たに開始しようとする研究者のために提供されたものである。これらは、社会調査の方法や一般市民の生活のために institutional ethnography の探究の可能性を明らかにするのに有用だと思われる。社会問題の問題提起のためのプログラムを実践する試みに関わる人々が、「再帰的に考える」ための準備になることを期待する。

[参考文献]

- Bisaillon, Laura (2012). An Analytic Glossary to Social Inquiry Using Institutional and Political Activist Ethnography. *International Journal of Qualitative Methods*, 11 (5),607-627.
<https://journals.sagepub.com/doi/abs/10.1177/160940691201100506>
- Bisaillon, L., & Rankin, J. (2013). Navigating the politics of fieldwork using institutional ethnography: Strategies for practice. *Forum: Qualitative Social Research*,14 (1).
<http://www.qualitative-research.net/index.php/fqs/article/view/1829/3472>
- Burawoy, M. (2009). *The extended case method: Four countries, four decades, four great transformations, and one theoretical tradition*. University of California Press.
- Burawoy, M. (2000). Introduction: Reaching for the global. In M. Burawoy, J. Blum, S. George, Z. Gille, T. Gown, L. Haney, M. Klawiter, S. Lopez, S. Ó. Riain, & M. Thayer (Eds.), *Global ethnography: Forces, connections, and imaginations in a postmodern world* (pp. 1-40). University of California Press.
- Campbell, Marie L. (2004). *Mapping Social Relations: A Primer in Doing Institutional Ethnography*. Altamira Press.
- Campbell, Marie and Frances Gregor. (2002). *Mapping Social Relations: A Primer in Doing Institutional Ethnography*. Garamond.
- Campbell, M., & Manicom, A. (Eds.). (1995). *Knowledge, experience, and ruling relations: Studies in the social organization of knowledge*. University of Toronto Press.
- Clough, P. (1993). On the brink of deconstructing sociology: Critical reading of Dorothy Smith's standpoint epistemology. *Sociological Quarterly*, 34 (1), 169-182.
<https://www.tandfonline.com/doi/abs/10.1111/j.1533-8525.1993.tb00136.x>
- Collins, Patricia Hill (2008). *Black Feminist Thought: Knowledge, Consciousness, and the Politics of Empowerment* (Routledge Classics) (Volume 138). Routledge.
- DeVault, Marjorie L. and Liza McCoy. (2002). "Institutional Ethnography: Using Interviews to Investigate Ruling Relations." (pp. 751-76) in Jaber Gubrium and James A. (Eds.), *Handbook of Interview Research*. Sage Publications.
- Frampton, C., Kinsman, G., Thompson, A., & Tilleczek, K. (Eds.). (2006). *Sociology for changing the world: Social movements/social research*. Fernwood Press.
- Marcus, G. (1998). *Ethnography through thick and thin*. Princeton University Press.
- Marcus, G. (2010). Notes from within a laboratory for the reinvention of anthropological method. In M. Melhuus, J. Mitchell, & H. Wulff (Eds.), *Ethnographic practice in the present* (pp. 69-79). Berghahn Books.
- McCoy, L. (2008). Institutional ethnography and constructionism. In J. Holstein & J. Gubrium (Eds.), *Handbook of constructionist research* (pp. 701-714). Guilford.
- Schatz, E. (Ed.). (2009). *Political ethnography. What immersion contributes to the study of power*. University of Chicago Press.
- Stanley, Liz. (2018). *Dorothy E. Smith, Feminist Sociology & Institutional Ethnography: A Short Introduction*. Independently published.
- Walby, K. (2007). On the social relations of research: A critical assessment of institutional ethnography. *Qualitative Inquiry*, 13 (7), 1008-1030.

- Smith, D. & David Sara J. (Eds.) (1975) *Women look at Psychiatry : I'm Not Mad, I'm Angry*. Press Gang Publishers.
- Smith, D. (1977). *Feminism and Marxism: A place to begin, a way to go*. New Star Books.
- Smith, D. (1981). *The experienced world as problematic: A feminist method*. University of Saskatchewan.
- Smith, D. (1987). *The everyday world as problematic: A feminist sociology*. University of Toronto Press.
- Smith, D. (1990a). *The conceptual practices of power. A feminist sociology of knowledge*. University of Toronto Press.
- Smith, D. (1990b). *Texts, Facts and Femininity: Exploring the Relations of Ruling*. Routledge.
- Smith, D. (1996). Contradictions for feminist social scientists. In Gottfried, H. (Ed.), *Feminism and social change: Bridging theory and practice* (pp. 46-59). University of Illinois Press.
- Smith, D. (1999). *Writing the social: Critique, theory, and investigations*. University of Toronto Press.
- Smith, D. (2002). Institutional ethnography. In May, T. (Ed.), *Qualitative research in action* (pp. 17-52). Sage.
- Griffith, Alison & Smith, D. (2004). *Mothering for Schooling* (Critical Social Thought). Routledge.
- Smith, D. (2005). *Institutional ethnography. A sociology for people*. AltaMira Press.
- Smith, D. (Ed.). (2006). *Institutional ethnography as practice*. Rowman & Littlefield.
- Smith, D. (2010). *Textual realities and the boss texts that govern them* [PowerPoint slides]. Centre for Women's Studies in Education. Ontario Institute for Studies in Education.
- Smith, D. & Turner, Susan Marie (Eds.). (2014). *Incorporating Texts into Institutional Ethnographies*. Univ. of Toronto Press.

[注] (以下の website は、2018.11.1 閲覧である。)

- 1 『現代社会学事典』弘文堂 2012 (上谷香陽) スミス, D.
- 2 Wikipedia, Dorothy E. Smith
https://en.wikipedia.org/wiki/Dorothy_E._Smith
- 3 Dorothy E. Smith Award Statement
<http://www.asanet.org/news-events/asa-awards/web-du-bois-career-distinguished-scholarship-award/dorothy-e-smith-award-statement>
- 4 Dorothy Edith Smith: History & Feminist theory (MARCH 9, 2018 BY SOCIOLOGY GROUP)
<http://www.sociologygroup.com/dorothy-edith-smith/>
- 5 Dorothy Smith: History & Feminist theory
<https://schoolworkhelper.net/dorothy-smith-history-feminist-theory/>
- 6 Wikipedia, Dorothy E. Smith, Standpoint theory
https://en.wikipedia.org/wiki/Dorothy_E._Smith
- 7 ENCYCLOPAEDIA BRITANNICA Standpoint theory FEMINISM WRITTEN BY: Elizabeth Borland
<https://www.britannica.com/topic/standpoint-theory>
- 8 Wikipedia, Standpoint theory
https://en.wikipedia.org/wiki/Standpoint_theory
- 9 Laura BISAILLON (2012) : standpoint (p.619)
- 10 Laura BISAILLON (2012) : Institutions (p.614)

D. スミス の Institutional Ethnography の社会学を 理解するためのキーワードをめぐって

- 11 Wikipedia: Institutional ethnography
https://en.wikipedia.org/wiki/Institutional_ethnography
- 12 Wikiversity : Institutional ethnography: Summary
https://en.wikiversity.org/wiki/Institutional_ethnography#Summary
- 13 Laura Bisailon (2012) : Institutional Ethnography (p.614)
- 14 <https://www.sssp1.org/index.cfm/pageid/1236/m/464>
- 15 Marjorie L. Devault: Social Problems. Vol. 53, No. 3 (2006), pp. 294-298.
https://www.jstor.org/stable/10.1525/sp.2006.53.3.294?seq=1#page_scan_tab_contents
- 16 Wikipedia, Dorothy E. Smith, Ruling relations
https://en.wikipedia.org/wiki/Dorothy_E._Smith
- 17 Laura Bisailon (2012) : Ruling Relations or Regimes (p.618)